様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：３３１１１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2014～2016
課題番号：２６６７０９９７

研究課題名（和文）手術を受けるてんかん患児に対する個別アレンジ可能なプレパレーション用教材の開発

研究課題名（英文）Development of training text that enables tailored psychological preparation for pediatric epileptic patients undergoing surgery

研究代表者
坪川　麻樹子（Tsubokawa, Makiko）

新潟医療福祉大学・健康科学部・助教

研究者番号：１０５６７４３１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：てんかん児への術前説明（プレパレーション）の実現に向けて、患児の個別性を踏まえ、アレンジ可能な汎用性の高いプレパレーション用教材の開発が必要であると考えた。説明をする看護師の意識下・無意識下での説明内容の情報を可視化し、教材作成につなげた。看護師のプレパレーションで伝えたい内容は6カテゴリーあった。児の不安を増強させないように看護師は内容を検討していたことが明らかとなった。この結果から、児が分かりやすく、不安を増強させないような仕掛け絵本教材を作成した。
また、母親も看護師と同様に児の不安を増強させたくない思いがあることも明らかとなった。今後も引き続きプレパレーションツールの検討が必要である。

研究成果の概要（英文）：In order to train nurses how to provide explanations to pediatric epileptic patients as psychological preparation for surgery, it is essential to develop a preparatory training text that is highly versatile and able to be modified to suit individual patients. In the present study, we developed a training text by visualizing the conscious and subconscious information that nurses include in their explanations to patients as psychological preparation for surgery. We categorized the information that nurses wanted to communicate to pediatric patients into six categories. Our findings indicated that nurses studied the information beforehand in an attempt to curb the patient's anxiety. Based on our findings, we developed a lift-the-flap textbook.
Our study findings also revealed that the mothers of these patients felt the same way as the nurses about curbing their anxiety regarding surgery. In future research, we will continue to investigate and assess this surgery preparation tool.

研究分野：小児看護学

キーワード：てんかん　小児看護学　プレパレーション　手術

１．研究開始当初の背景

子どもは自分の健康問題に関する決定に参加し、自分の意見を表明する権利を有することが広く認められている。1994 年、日本において「子どもの権利条約」が批准されて以降、子どもの意思を尊重した医療提供を進めるために、アセント(assent)、プレパレーション(preparation)など、看護上の取り組みが注目されている。近年、日本では、患児のためのプレパレーションのツールの開発が進んでおり、周手術期のツールの開発も着手されている。しかし、脳外科的な手術を受けるてんかんの患児に対するプレパレーションの報告はほとんど認められていない。そこで、研究者はてんかんの患児への術前説明(プレパレーション)の実現に向けて、個別性のアレンジ可能な、汎用性の高い教材の開発が急務であると考えた。しかし実際の臨床の現場では、てんかんで手術を受ける患児は、術後の状態を理解しきれずパニック状態になり、安静と管理が困難になる事例が多々ある。それらを回避したいと看護師は考えていても、術前の不安を煽りパニックに陥らないようにと、説明を回避あるいは簡潔にしてしまう傾向がみられていた。さらに看護師によって伝え方に差が生じており、看護ケアとしての一定の質が担保できていない課題もあった。また、このように看護師が説明しにくい、あるいは簡潔にしてしまう部分は、術後の安静、創部の安全確保や術後の副作用等、対象にとってネガティブであるほど、重要でもある内容であることもわかってきた。

看護師の意識と無意識に着目した情報の可視化は、看護の概念モデルの形成となることに着目し、術前説明のための教材として活用するために必要な構成要素を明らかにして、教材を開発することにした。

また、てんかんの手術を受ける児の母親は、手術やプレパレーションに対しどのように思っているのか、看護師が行っていることに対して、患児の反応をどのように捉えているのだろうかという疑問も浮上した。

２．研究の目的

手術を受けるてんかんの患児に対する、個別性のアレンジが可能な術前プレパレーション用教材の開発に向けて、看護師の意識下・無意識下にある内容の重みづけを、セルフモニタリングによって明らかにする。そして、てんかんの患児に対する、術前の説明に関する概念モデルを形成する。そしてそれを搭載した教材のプロトタイプを作成し、個別性がアレンジ可能となる機能の有効性を明らかにする。また、児の母親はどのような思いで手術説明をするのかを明らかにし、ツール作成の一助とする。

３．研究の方法

1) 看護師の意識下・無意識下にある内容の重みづけについて

(1)　研究デザイン

半構造的面接法による質的帰納的デザインと、心理量を定量データとする量的研究デザインの混合型デザインとした。

(2) 調査対象

てんかんの手術を受ける児に対し、プレパレーションを実施したことのある看護師 10 名

(3) 調査期間

平成 26 年 7 月～10 月

(4) 調査方法

① 調査 1：半構造的面接法

てんかんの患児への術前のプレパレーションの実施内容、工夫している点、重要である点(以下、重要さ)、困難と感じている点(以下、困難さ)、そのときの対象の反応、終了後の評価について 30 分程度、自由に語ってもらった。

② 調査 2：重要さ、困難さの心理量測定

面接調査後、引き続き対象者には「心理量測定ツール Rami」を用いて心理量の測定を行った。タッチパネル式 PC にて、プレパレーションでの重要と考える項目を 5 項目以内で抽出し、それらをフリーハンドで円を描写してもらった。重要ほど大きな円となるようにしてもらった。次に、それらを困難さが高い順に高低が出来るように、描いた円それぞれに高さをつけてもらった。重要さは円の面積(cm^2)とし、困難さは円の高さ(cm)として、これらを数値データとした。

③調査 3：混合型分析

面接で得られた定性データは質的分析し、Rami で得られた定量データは量的に分析した。それらを統合し、分析を行った。

2) プロトタイプの作成について

1)で得られた結果をもとに、連携研究者とともにプレパレーションツールの開発を行った。

3) 児の母親の術前説明への思いについて

(1) 研究デザイン

M-GTA を用いた質的帰納的デザインとした。

(2) 調査対象

てんかんの手術を受けたことのある児の母親 8 名

(3) 調査期間

平成 28 年 3 月～8 月

(4) 調査方法

半構造的面接を実施し、母親に手術の術前説明に対する思いを語ってもらった。またその時に 1)で得られた結果も提示し、思いを語ってもらった。

４．研究成果

1) 看護師の意識下・無意識下にある内容の重みづけについて

(1) 看護師のプレパレーションで伝えたい内容は≪手術の目的≫≪術後の身体不調≫≪疼痛≫≪術後のボディイメージの変化≫≪術後の制約≫≪手術への励まし≫の 6 カテゴリーであった。

(2) ≪手術の目的≫は重みづけで最も重要で困難であり児の理解度について一般的な発達段階の小児よりも特別な配慮が必要である。障害特性に合った内容と方法の工夫が必要である。

(3) 児の不安を増強させないよう、プレパレーション内容を取捨選択するには、親との協力が重要である。

(4)内容を児に分かりやすくかみ砕いて伝えられる、他職種や保護者でも利用できるツールの開発が必要である。

2) プロトタイプの作成について

1)の結果をもとに、プレパレーションツールの作成をした。作成時、重要なカテゴリーをどのように表現をするかを検討した。

(1) ≪手術の目的≫は、手術を受けることを児に分かりやすいように、てんかん発作を「頭の中の雷」と表現した。(写真 1)

写真 1：プロトタイプの一例

(2) ≪手術への励まし≫は、児一人で頑張るのではなく、保護者や医療者も一緒に頑張ることを伝えられるようにした。

(3) ≪術後の制約≫は、動けないことを伝えるのではなく、「動けるようになったら何をして遊ぼうか」と、手術を乗り越えた後のイメージができるようにした。

(4) ≪術後のボディイメージの変化≫は、術後利用する医療機器、点滴や膀胱留置カテーテルなどを遊びながら理解できるようにした。

(5) ≪術後の身体不調≫≪疼痛≫は、術後に起こりうる身体不調を細かく伝えることは避け、不調があれば伝えてほしいことを伝えられるようにした。

(6) 知的障害がある児の特性を踏まえ、説明を集中して聞けない可能性も考え、仕掛け絵本として遊びながら集中できるものとした。

(7) 児の特性を踏まえるためには、親との協力も必須である。保護者用に説明文を加えることで保護者も納得し、児とともに使用できるように工夫をした。

(8) 目で見てわかりやすくし、自分自身に投影できるよう、男の子、女の子のキャラクターを選べるようにした。

3) 児の母親の術前説明への思いについて

(1) 対象は 40～50 歳代の母親 8 名で、手術経験回数は 1～4 回であった。

(2)M-GTA の手法で分析し、＜概念＞が 17、【カテゴリー】が 7 抽出された。

ストーリーラインは以下のとおりである。

てんかんの手術を受ける子どもの母親は、本当に発作がなくなるのだろうかと＜子どもに発作が出たときの落胆と将来的な障害への不安感＞と、それでも発作が止まってほしいとする＜将来は発作が止まることへの希望＞の二つの思いの渦中にいた。不安や希望が入り混じる中、【‘発作’がなくなることへの祈り】を持ち、＜子どもの脳外科手術に対するデメリットを熟考した上で行う代諾としての意思決定＞に迫られ、【術後の後遺症の懸念と代諾者としての葛藤】を抱きながら、手術を受けることへの意思決定を行っていた。

母親は、手術・入院にあたり＜子どもの様子から感じ取る手術への不安と恐怖＞を感じ取っている。また、逆に、本当に発作が止まるのだろうか、手術をしていいのだろうかと＜術後のわが子に伝わってほしくない自分の不安感＞を持ち、お互いの不安感が【親と子の術前の不安感の共鳴】として立ちはばかる。子どもには不安や恐怖を感じてほしくないという願いから、＜子どもの動揺や拒否を想定しながら推し量る手術の説明のタイミング＞を考え、内容は＜知らなくてもいいこともあると思う子どもへ術後に起こりうることの説明＞と配慮をし、説明する内容を考えていた。また、＜看護師よりも自分がすべきと思う子どもへの説明＞とし、母親自身が説明をするべきと考えており、【子どもの‘恐怖の回避’を最優先したい術前プレパレーション】を母親なりに考え、子どもが手術へ向かえるように最善の方法を考えていた。

一方で、＜看護師の説明から生まれる理解と安心＞もあり、母親は看護師から説明に対する相談を受けることで安心も生まれている。このためには＜コミュニケーションで生まれる看護師との信頼関係＞も必要と感じていた。信頼関係ができることで＜信頼できる看護師から守られていると感じる安堵感＞＜看護師のわが子への対応の安心感＞を持ち、不安な手術や入院ではあるが、母親の中には【看護師からの対応で感じる安らぎ】が生まれていた。

また、入院生活の合間で保育を受けられることにより＜保育士と過ごす時間があることでの緊張の緩和＞も感じていた。

発作が本当になくなるのか、手術をしてよかったのかという葛藤がある中で、＜他患者の母親との情報共有による励まし＞を受け、また子どもからは＜手術を乗り越えた経験からくる抵抗感のない検査入院＞ができることで【情報量と経験値により和らぐ抵抗感】を感じていた。また、母親が代諾して受けた手術であるが、子どもが大きな手術を乗り越えたという＜手術を乗り越えた子どもの強さと生命力に対する称賛＞があった。何度か手術や検査を経験することで、いやがらずに検査を受けられるようになり、＜手術に対する反応から感じ取る子どもの成長＞を感じ取っていた。【子どもの強さと生命力の実感】が生まれ、子どもの強さを母親の励みとしていた。その中で常に母親は【‘発作’がなくなることへの祈り】を持ち続けていた。

(3) このストーリーラインから、母親も看護師と同様に、児の不安の回避を考えていることが明らかとなった。また、看護師からの説明よりも、母親が説明をしたほうが児は安心するという思いもあった。このことから、子どもの特性をとらえ、母親の思いもくみ取ることが重要で、どちらの不安も軽減できるプレパレーションツールの検討が必要であることが示唆された。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

①<u>坪川麻樹子</u>、<u>住吉智子</u>、<u>岡崎章</u>、てんかんの手術を受ける患児に対するプレパレーション内容の検討－看護師が無意識下で行う説明の重みづけと定量化－、新潟医療福祉学会誌、査読有、16(2)、2017、22-29

②<u>坪川麻樹子</u>、てんかんの手術を受ける患児に対するプレパレーション-デザインを応用した心理的準備-. 日本デザイン学会誌デザイン学研究特集号、査読有、24(1)、2016、10-16

〔学会発表〕（計２件）

①<u>坪川麻樹子</u>、野澤祥子、松井由美子、<u>住吉智子</u>、てんかんの脳神経外科術前の患児の母親の思いに関する質的研究、日本小児看護学会第 27 回学術集会、2017.8、国立京都国際会館（京都府京都市）

②<u>坪川麻樹子</u>、<u>住吉智子</u>、<u>岡崎章</u>、てんかんの手術を受ける患児に対するプレパレーション内容の検討－看護師が無意識下で行う説明の重みづけと定量化－、第 62 回日本小児保健協会学術集会、2016.6、長崎ブリックホール（長崎県長崎市）

〔図書〕（計　　件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者
坪川麻樹子（TSUBOKAWA, Makiko）
新潟医療福祉大学・健康科学部・講師
研究者番号：10567431

(2)研究分担者
住吉智子（SUMIYOSHI, Tomoko）
新潟大学・大学院保健学研究科・教授
研究者番号：50293238

(3)連携研究者
岡崎　章（OKAZAKI, Akira）
拓殖大学・工学部・教授
研究者番号：40244975